

オンライン投稿に含まれる自己開示の深さが回答メッセージに与える影響

山本 真由

米国の先行研究では、オンラインプラットフォームで投稿主の投稿メッセージに含まれる自己開示が深いほど、より相互関与的な応答、相互的な自己開示を引き出すことが明らかになっている。また、投稿主に対する信頼性が応答メッセージの長さを媒介していた。他方、日本では自己開示の深さに焦点をあてた研究は多くない。そこで、本研究では日本人を対象に、オンラインプラットフォームでの自己開示が他者からの応答にどのように影響するかを検討した。下記4つの仮説—仮説1: 深い自己開示を含む支援を求める投稿は、そうでないものと比較して、回答者からより相互関与的なメッセージを受け取る、仮説2: 深い自己開示を含む支援を求める投稿は、そうでないものと比較して、回答者からより多くの自己開示を引き出す、仮説3: 回答者の、投稿主に対する知覚的信頼性は、サポートを求める投稿への相互的関与と回答者の自己開示と正の関連をもつ、仮説4: 回答者の、投稿主に対する知覚的信頼性は、サポートを求める投稿への相互的関与と回答者の自己開示に与える影響を媒介する、を立てた。

参加者を3つの条件（統制条件・周縁的自己開示条件・中核的自己開示条件）にランダムに割り振り、Web実験を行った。参加者はオンラインの質問投稿サイトを想定し、異なる自己開示の深さを含む投稿メッセージをそれぞれ読んだ後、投稿メッセージに対する回答を自由に記述した。投稿メッセージはいずれも、SNSにおけるトラブルの対処法を求めるもので、予備調査の結果、採用した。回答者の相互的な関与は、回答メッセージの長さ、回答メッセージに含まれる心理的プロセス語の使用頻度、回答メッセージに含まれる認知処理語の使用頻度で測定した。相互的な自己開示は回答メッセージに含まれる一人称使用頻度で測定した。加えて、日本語では主語が欠落した文章が成立することを考慮し、相互的な自己開示の程度はコーダーによって3段階でも評価された。知覚的信頼性は、先行研究で使用された3項目を用いて測定した。

自己開示の条件を独立変数、回答メッセージの長さ、回答メッセージに含まれる心理的プロセス語の使用頻度、回答メッセージに含まれる認知処理語の使用頻度、一人称使用頻度、相互的な自己開示の程度を従属変数とした1要因分散分析を行った。さらに、知覚的信頼性を媒介変数とする媒介分析を行った。分析には、R 4.3.1を使用した。R内でRMeCabを用いて形態要素解析を、J-LIWC2015 (Igarashi et al., 2022)を用いて心理学的特性を数値化したテキスト解析を行った。その結果、仮説2は一部支持され、その他は支持されなかった。

投稿メッセージに含まれる自己開示の深さが、回答メッセージに影響しないのは先行研究に反する結果であった。匿名場面においては、本来親密さを高める自己開示が一定レベルを超えると、その時点での関係から予期される開示内容を大きく上回ることになる。コミュニケーション相手が関わりたくないと感じたことで、相互な関与が生じなかったと考えられる。また、投稿主に対する信頼感が媒介しなかった要因について、本研究のCMC場面では即時的な反応が無かった。このことから、投稿主に対する信頼感が実際の回答（行動）に与える影響が薄まったと考えられる。加えて、匿名のオンライン場面においては、現実社会とは異なる振る舞いが現れることが明らかになっており、回答者個人の態度が影響している可能性も考えられる。本実験で用いた調査票がリアリティさに欠けた点は本研究の課題であり、今後は個人差に着目するとともに、より現実に即した形で実施するのが望ましい。（社会心理学）